

識別番号	D 1
取組名称	21 世紀 COE プログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」
取組代表者	村井吉敬（外国語学部アジア文化研究室）
取組実施 担当者	赤堀雅幸（外国語学部アジア文化研究室）、安野正士（国際教養学部）、石澤良昭（外国語学部アジア文化研究室）、加藤浩三（法学部国際関係法学科）、川口和子（外国語学部国際関係副専攻）、私市正年（外国語学部アジア文化研究室）、岸川毅（外国語学部国際関係副専攻）、小林宏光（国際教養学部国際教養学科）、下川雅嗣（外国語学部国際関係副専攻）、谷洋之（外国語学部イスパニア語学科）、寺田勇文（外国語学部アジア文化研究室）、中野晃一（国際教養学部国際教養学科）、中村雅治（外国語学部フランス語学科）、野宮大志郎（外国語学部国際関係副専攻）、幡谷則子（外国語学部イスパニア語学科）、三浦まり（法学部法律学科）、三田千代子（外国語学部ポストガル語学科）、James Farrer（国際教養学部国際教養学科）、Linda Grove（国際教養学部国際教養学科）、Mark Mullins（国際教養学部国際教養学科）、Sorpong Peou（国際教養学部国際教養学科）、David Wank（国際教養学部国際教養学科）
取組単位	グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻・国際関係論専攻・グローバル社会専攻
Summary	" Towards Area-Based Global Studies " (AGLOS) is Sophia University's COE (Center of Excellence) program. It is a program for research and graduate education aimed at understanding the interaction between global processes in the political, social, economic, and cultural spheres on the one hand, and local society and history, on the other. In recent years, a growing number of universities around the world, mainly in North America and Europe, have set up academic programs in global studies. The establishment of AGLOS at Sophia University reflects our commitment to explicating global phenomena from the standpoint of the local specificities of Japan, Asia, the Middle East, Latin America, and Europe. AGLOS also firmly integrates Sophia University's traditional strength in area studies with the pursuit of a new focus on global studies in the scholarly endeavor to explain today's world.

## 1. 取組の概要

21 世紀 COE プログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」(AGLOS) とは、政治・社会・経済・文化面での様々なグローバルな動きと地域社会・歴史との間の相関関係を対象とする研究・教育プログラムで、文科省の支援により 2003 年度 (11 月) から 2007 年 3 月まで実施された。AGLOS では、特に日本・アジアに根差しアジア・中東・ラテンアメリカなどにおける地域固有性を重視する立場から、グローバルな流れを解明することを目指した。研究面では、およそ 20 名の事業推進担当者を中心に、上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究・国際関係論・グローバル社会専攻の教員、上智大学の他の教員、また海外拠点など他大学の研究者、大学院生・ポストクの参加を呼びかけ、地域立脚型グローバル・スタディーズ

の構築を図った。具体的には、Ⅰ『グローバル化の中の政治：重層的ガバナンス』、Ⅱ『グローバル化の中の社会・経済：市民社会と開発・交易』、Ⅲ『グローバル化の中の文化：宗教・文化の越境とアイデンティティの動的構築』の3群で構成され、各群の研究プロジェクトを総括しつつ研究計画を推進し、その成果を世界に発信することを目標とした。

大学院教育の面では、本プログラムに根差した持続的な研究者養成を行うために、外国語学研究科の3つの専攻をグローバル・スタディーズ研究科へと改組し（2006年4月）、中でも比較文化専攻は、グローバル社会専攻に組織改編を行い、日本では初めて、本格的なグローバル・スタディーズを目指す教育組織になった。従来の「地域研究専攻」も、グローバル・スタディーズを視野に入れつつ、課程の再編がおこなわれてきた。グローバル・スタディーズに相応しい真にグローバルな教育研究環境を構築するというAGLOSの特色は、海外拠点を含む国際ネットワークの整備をおこない、既存の海外拠点としては、11年間にわたりアンコール研修所として実績を挙げ、2002年秋に改組・強化されたカンボジアのアジア人材養成研究センターをあげることが出来る。そしてAGLOSプログラム実施過程で、エジプト・メキシコ・ブラジル・中国・フランスなどに海外協力拠点の整備を進め、それぞれの拠点で国際シンポジウムを実施した。

## 2. プロジェクト立ち上げの過程で努力した内容

2. 1 上智大学グランド・レイアウトのなかに明確に位置づけをし、大学院再編プログラムに組み込むことが文科省21世紀COEプログラムとしては肝要な点であった。そのため大学当局に組織改編を促し、大学全体の研究・教育プログラムであることを認識していただくよう格段の努力を傾注した。

2. 2 研究科横断、専攻横断型のプログラムであることから、事業推進担当者を決定するにあたっては、本プログラムを十全に理解していただき、実施でき得る体制を構築せねばならず、事前の密度の濃い研究会を頻繁に実施した。

2. 3 少なからぬ予算が配布されることになるので、大学のこれまでの予算実施の枠組みに収まらぬ面もあったため、財政当局との調整にもかなりの努力を傾注した。

## 3. 有益だった点及び苦勞した点

3. 1 以下の4つの点での成果を上げることができた。

### 3. 1. 1 グローバル・スタディーズ研究科を新設しえたこと

制度的には、すでに述べたように、外国語学研究科はグローバル・スタディーズを中心に再編され、本研究計画に根差した持続的な研究者養成を行うことを構想してきたが、2006年度にはグローバル・スタディーズ研究科が開設されることになった。とくに比較文化専攻はグローバル社会専攻として再編され、地域立脚型グローバル社会研究コース、国際経営開発学コース、比較日本研究コースの3コースが設置されることになった。この地域立脚型グローバル社会研究コースはCOEプログラムとまさに同時並行で開設にこぎつけたものである。特筆すべきことは、研究科横断型「地域立脚型グローバル・スタディーズ」プログラムが新設され、今後、「地域立脚型グローバル・スタディーズ」が継続的に発展していくことが期待されている。

### 3. 1. 2 若手研究者の育成

AGLOSの目的の1つは、大学院生とくに博士後期課程に在籍する学生および博士課程満期

退学者等のいわゆる若手(次世代)研究者による研究活動を支援し、博士論文完成へと導き、また、ポスドクの研究活動を支えることにあった。この面でわたしたちは、つぎのようなプログラムを進めてきた。

- ①研究助手として採用
- ②若手研究者の研究支援
- ③若手研究者による国際ワークショップ
- ④若手研究者の成果をワーキングペーパーとして出版
- ⑤海外のシンポジウムで若手研究者が発表機会が設けられた
- ⑥若手研究者が研究プロジェクトに参加
- ⑦若手研究者のセミナー

### 3. 1. 3 さまざまなシンポジウム、ワークショップを実施できたこと

AGLOS の研究の深化と成果を問う国際シンポジウムが毎年開かれた。著名な海外の研究者や実践家を招待し、グローバル・スタディーズの最前線の議論がそこでは展開された。また海外の拠点(カンボジア・シエムレアップなど)でも国内でもさまざまなシンポジウムやワークショップが開催されてきた。

### 3. 4 膨大な研究成果を刊行できた

年2回発行のAGLOS News(日英両文)の発行、ワーキングペーパー、AGLOS 叢書の刊行(全6巻)など多くの印刷物による成果の発表が行われてきた。

## 3. 2 AGLOS 実施にあたって苦労した点

### 3. 2. 1 大学当局との制度面、予算面、施設面などで新規事業からくる調整の難しさ

### 3. 2. 2 文科省21世紀COEプログラム委員会による中間評価への対応の難しさ

2004年度にCOEプログラム委員会から中間評価が実施された。そこでは「拠点のプログラム名である『地域立脚型のグローバル・スタディーズ』とは何か、『グローバル化のもとにおける地域研究』とはどこが違うのかなどが未だ明白ではなく、また、カンボジアは別として、他の大学における地域研究に比しどこが特徴であるかも、まだ見えてこない。したがって、当初計画を練り直し、グローバル・スタディーズの概念を明確にしたうえで、地域研究からそれを構築する方向を強く考え、それを進めるなどの方法によって、拠点形成を進めることが肝要であり、その線に沿った具体的な成果を挙げられたい」と述べられた。そもそも採択されたプログラムについて、当初計画の練り直しや、概念の明確化を求めるということ自体、本来ありえぬことで、評価そのものが受け容れ難いものと考えた。根源には、地域研究やグローバル・スタディーズに対しての既存の学会サイドからの無理解があるのではないかと思われた。

## 4. 大学および在学生に与えた影響、効果

21世紀COEプログラムは、いわば鳴り物入りで喧伝されたプログラムであり、それを上智大学も実施できたことは、上智大学にとって、また学生にとって大きな成果であったといえる。とりわけ大学院生にとっては、実質的に自分たちの研究を推進し、その成果を発表する機会が飛躍的に増進され、大きなプラスの影響であると評価しうる。大学にとっても、対外的また学内的にも自らの研究・教育にそれなりの自信を持ちうることになったのではないだろうか。

## 5. 総括と将来の展望

21世紀COEに引き続き、2007年度よりグローバルCOEプログラムが実施されている。これには残念ながら上智大学のプログラムは採択されていない。21世紀COEの経験をより広く共有し、その成果と問題点をお互いに論じ合うことによってこのような大型の競争資金への上智大学としての対応が生まれてくるのではないと思われる。

COEのめざす「世界最高水準の拠点」として1つの学問領域を構築しえたかについては今後の評価をまたざるをえないが、この意味で、2007年2月にカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校においてグローバル・スタディーズの推進と世界的拠点間の交流・協力を目的に国際会議が開かれた際、わたしたちの拠点が招聘を受けたことは、本計画が海外の第三者から見ても、それなりの成果を挙げたことを示唆していると思われる。